

蔣 塗

繪 師

傳 傳

下

198  
445



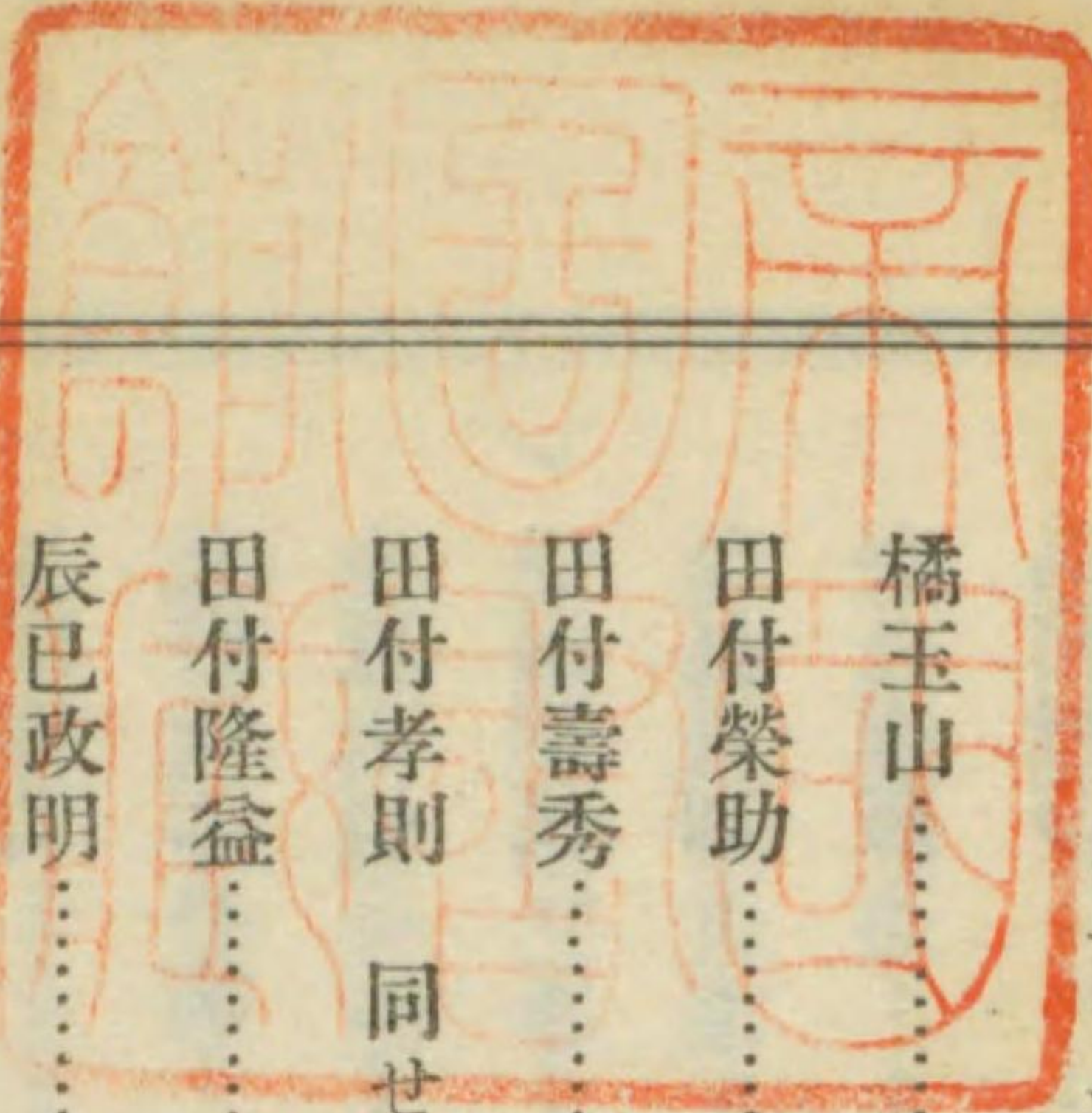


蒔繪師塗師兩工傳下卷目次

○蒔繪師目次

(五十音順)

橋玉山	一	長府	一一
田付榮助	一	珍儀	一一
田付壽秀	三	堆朱平十郎	一二
田付孝則	四	土田宗悅	一六
田付隆益	五	天下一	一七
辰巳政明	五	得好齋	一七
谷田忠兵衛	五	百々玉泉 並玉善	一七
玉楮象谷	六	百々玉翁	一八
丹阿彌丹後	一一	中大路茂永	一九





永田友治	.....	一九	野村休甫	.....	二六
永田文五郎	.....	二〇	野村樗平	.....	二六
永田祐助	.....	二〇	野村嘉之	.....	二六
長野横笛	.....	二一	寶珠齋	.....	二六
長野次郎兵衛	.....	二一	長谷川巨鱗	.....	二七
中原末恒	.....	二二	長谷川重美	.....	二七
中山胡民	.....	二二	服部永貞	.....	二七
奈良貞利	.....	二三	法印康圓	.....	二七
奈良雪勝	.....	二三	原羊遊齋	.....	二八
二宮桃亭	.....	二三	半三郎某	.....	二八
野路善鏡	.....	二五	菱田久榮	.....	二九
野村九圭	.....	二五	菱田成信	.....	二九

藤井滿忠	.....	二九	門入	.....	四二
蒔井滿喬	.....	三〇	安川某	.....	四三
藤田爲正	.....	三〇	安弘	.....	四三
本阿彌光悅	.....	三〇	彌兵衛某	.....	四三
蒔繪師市兵衛	.....	三七	山田常嘉	.....	四四
蒔繪師源三郎	.....	三七	山田豐美	.....	四四
蒔繪師清兵衛	.....	三九	山本春正	.....	四五
蒔繪師則季	.....	四〇	山本景正	春正二代	四七
松井佐一	.....	四〇	山本政幸	三代	四七
源重直	.....	四一	山本春繼	四代	四七
望月重藏	.....	四一	山本正令	五代	四八
望月半山	.....	四一	山本正之	六代	四八



山本正德	四九
山本正周 八代	四九
山本正章	四九
山本正兼	四九
山本利兵衛	五〇
山本周三	五〇
山本光春	五一
山本武光	五一

蒔繪師傳終

○塗師目次

(五十音順)

池田源兵衛	五三	金子政次郎	五八
石岡庄壽郎	五四	神田五兵衛	五八
雨橋	五四	記參	五九
上田喜三郎	五五	木村表齋	五九
梅田三五郎	五五	清光	六〇
漆部造兄	五六	國友	六〇
大久保辰五郎	五六	小林敬次郎	六〇
太田鐘次郎	五七	近藤道喜	六一
大橋庄兵衛	五七	近藤道惠	六一
大藤長十郎	五八	近藤道志	六一



佐野長寛	六二	鈴木某	六八
澤本一國齋	六三	隨親	六八
篠井秀次	六三	寸法齋	六八
篠井善紹	六四	盛阿彌	六八
篠井長菴	六四	關大隅	六九
篠井與齋	六四	關庄次郎	六九
篠井林齋	六五	關宗長	六九
鹽谷長兵衛	六五	鐫魑	七〇
正圓	六五	道性	七〇
珠光	六五	治五右衛門	七〇
春慶	六六	桐村	七一
鈴木庄次郎	六八	飛來一閑	七一

遠坂宇兵衛	七二	西田宗五郎	七六
友重	七二	西村宗忠	七七
友長	七二	野口豊八	七七
中村宗哲	七三	野村四郎右衛門	七八
中村元哲	七三	橋本市藏	七八
中村汲齋	七三	服部藤平	八一
中村深齋	七四	服部彌三郎	八一
中村猱齋	七四	羽田五郎	八一
中村得玄	七四	法阿	八二
中村豹齋	七五	福藏	八二
成田三左衛門	七五	福田文吉	八三
成田正武	七六	藤重藤嚴	八三



藤重藤元	八五	守弘	八九
藤田重兵衛	八五	安福吉五郎	八九
膜野九助	八五	安福源七	八九
俣野寛兵衛	八五	柳瀬柳齋	九〇
前村俊造	八六	山打三九郎	九〇
三上治助	八七	山本安兵衛	九一
三谷傳次郎	八八	遊佐忠藏	九一
三見宿禰	八八	余參	九一
源良直	八八	吉長	九二
守氏	八八	吉行	九二
守近	八九	若井源助	九二

蒔繪師塗師兩工傳終

蒔繪師兩工傳下卷

蒔繪師之部

橘玉山

蒔繪師の名手なれども其傳詳ならず。

田付榮助

田付榮助は、蒔繪の名家、田付勘右衛門の裔にして、富小路二條上ル鍛冶町に住し、印籠を善くせり。嘗て薩州侯の印籠を製し、千疋の猿を描く、功成りてこれを奉りしに、其の圖全く顛倒せり。榮助大に驚き疎漏の罪を謝し、持ち歸らんとせしに、侯深く其の技術の

風俗圖畫刊行會編



精細なるに感せられ、却て賞金若干を賜はりたり。當時同業者相語りて曰く、仕損じて褒美を貰ひしは、榮助一人なりと。平生晝間は概ね雑事に奔走し、夜間人定まりて後、始めて其業に就く。最も得意とする所は、獸類の蒔繪なり。榮助一貧洗ふが如く、嚴冬猶衣を重ねるの資に乏しく、六疊一間の裏長屋に住し、家眷五人と同居せり。其の母常に他に雇用せられて生計を助けし程なりといふ。榮助子三人あり、父の業を継ぎしが、其の家遂に斷絶せり。

按に、田付壽秀、同榮助は共にこれ有名の蒔繪師田付氏の後なるべし。一は勘右衛門の後といひ、一は長兵衛の後といふ。長兵衛勘右衛門何れが首祖なるを知らざれども、もとこれ同一族なり。寛政年間江戸に田付孝則といへる蒔繪師あり、これ亦京都田付氏の別家なるべし。

## 田付壽秀

田付壽秀は、京都の人、東溪と號し、蒔繪の名工にして殊に印籠を善くせり。其の先は彼の雍州府志載する所の蒔繪師五人中の一人長兵衛これなり。壽秀淡逸にして世俗と交はるを好まず、逍遙自適以て己が樂となす。其の住する所はいづれも裏長屋にして年々居を移すこと實に數回なり。しかして時に金錢を得れば、直にこれを懐にし飄然家を出でて花街に留連し、數日家に歸らざることあり。藝妓某を納れて妻となすに至る。此の婦死して後に、人に語りて曰く、余は妻に離れてより居常不自由を感ずれども、己が家累を脱したれば、藝道の爲めには却て幸となれりと、篋瓢屢々盡くるも亦顧みず。知人某爲めに費を給して毎に其の作を成就せしむと。歌人加茂季鷹



と交はり、最も親しく、遂に狂歌を善くするに至れり。壽秀の製品世に傳ふる尠からず。然れども舟木宗治君所藏の古錢模様香箱の如きは最秀絶なる者とす。其の古錢の形狀色澤等、頗る古雅を存し、善く眞に逼れり。嘗て某地方の古器陳列會に出品せしが、後にこれを驗すれば、錢圖の傍に刀痕あり、蓋し何人か其の下地に眞の錢を用ひしかを疑ひ、竊に刀をもつて之を探りしものなるべしといふ。壽秀の歿年詳ならず。或書に文政の末七十歳にて歿せりと。然れども其の製品に文政十二年七十三歳と銘せしものあり、蓋し此の頃まで其の製作に従事せしものならん。或人の所藏に岡本豊彦の下畫にて壽繪せし印籠あり。

田付孝則 同せう女

孝則及びせう女は江戸に住せり。もと京都田付壽秀の一族なるも、江戸に來れるなるべし。孝則狩野派の畫を善くせり。

田付隆益

傳詳ならず。

辰巳政明

俗稱次兵衛、傳詳ならず。

谷田忠兵衛

谷田忠兵衛は江戸の漆工にて寶曆明和の頃一種の漆畫を仕出だして蜂須賀重喜侯に召抱へられたるものなるが、其法朱漆の上に白黄茶



萌黄等の色漆を以て山水人物草木花卉鳥獸などを描けり、其畫風光琳に似たり。これを阿波の人谷田蒔繪と稱するよし、其法を子孫にさへ傳へざりし後一代にして亡びしかば、其製作品極めて世に稀なりといふ。

### 玉楮象谷

象谷は讃岐高松の鞆塗師藤川理左衛門（周南と號す）の子にして通稱を敬造といふ。父に従ひて鞆塗を修業する傍ら好みて彫刻をなし京師の貫名海屋、永樂保全、僧雲華、浪華の篠崎小竹、讃岐の宮本敬哉、阿部絹洲等と風月の交を結びしが、殊に保全敬哉とは最も意あへる友なりき。中年に及びて専ら意を漆器彫刻に注ぎ、これを學ぶこと數年、遂に其蘊奥を極め、唐山の張成存星の遺風に據り本邦古

代の製に基き一種の髹法を發明せり、其法たるや竹籃或は木材を質として緻密なる花卉草木等の模様を彫り、青黄紅等異色の漆を以て其彫付けたる模様を填め、一層其光彩を鮮明ならしむるものなり。また堆黑はこの人の最も得意とする所なりき。これ等の技術は天才の然らしむる所にて名聲忽ち四方に傳播し、傳手をもとめて製造を乞ふもの少なからず。文政十三年十月始めて藩主松平頼恕に仕へ、それより頼胤、頼總二代に仕へて藩主の爲に製せしもの凡そ三百餘箇に達せり。其功を以て藩主より扶持を與へられ、帶刀をゆるされ、玉楮の姓をも授けられしとなん。嘉永年間亞米利加の軍艦某號讃岐寒川郡志度浦に來舶せし時、象谷大盆一個を贈りしに、艦長大に感賞して厚く謝したりといふ。明治二年二月歿す、年六十四。弟舜造（文綺堂と號す）子爲造その遺法を受けて今猶從事せりとなん。



又一傳に曰く、玉楮象谷はもと藤川氏、名は爲三、字は子成、俗稱敬造、象谷は其の號なり。蛙十一、蝸牛二十七、蜻蛉二十九、蠅九、蜂四、蝶二十六、玉虫二、蚱蜢四、蝥四、蟋蟀二、螳螂四、蜘蛛十八、蠹二、蜈蚣五、兜虫一、雀十九、鷺七、翡翠十、鶺鴒一、鷲三、合せて千零八十六個の物象を彫刻せり。其の製、精細緻密にして、殆ど肉眼をもて窺ふこと能はざるなり。細にこれを視れば、蠢々として皆生動の勢あり。藩主大に其の妙技を嘆賞し、帶刀を許し、苗字玉楮を賜ふ。一番これを榮とす。高橋茂松道人爲に玉楮氏の説を作り象谷に贈る。其文に曰く、象谷山人一に藏黒に作る、藏黒は孔子家語より撰び出だせる文字なりといふ。文化三年十月四日讃岐の高松外磨屋町に生る、其の父洪隆（俗稱圭三又理右衛門）鞞塗師を業とし、兼ねて篆刻を善くす、象谷幼より父の膝下にありて塗師及び彫

刻を學び、天保元年藩主松平氏に仕へ、器物を製作する多し、中に就き其の技量を顯はし、名工の稱を得たるは、同十年八月藩主に奉りし一角の印籠これなり、方一寸の印籠に、荷葉五十五、花三十、太湖石二、龜三百四十三、蟹四百三十三、蛙四、玉楮爲氏余未知其先自何人出也、而玉楮豈無其故乎、人之姓氏或出於地、或原於官、或取於事、今於象谷余反覆察之、而知其說、昔人有爲君以玉爲楮葉者、三年而成、以巧食其圖、象谷山人我讚之良工、而有磊落之奇才、其運刀也、善摹漢製、其用漆也、巧擬宋工、蓋天下無能及者焉、嘗雕昆蟲千種子方寸之一角、具躰燦然、蠢々欲生動、而其大僅如芥子、雖明如離婁、殆不易辨也、而其成也、不過旬有餘日云、山人嘗携來而示余、余乃蹶然嘆曰、吁哉、象谷之妙技、一至于此耶、象谷遂獻之先公、公深愛賞之、因賜佩雙刀班列官工、可謂榮幸矣、余意此事



一〇  
與宋人頗相類、然則玉楮之姓、殆由是乎、柳公賜之乎、將自稱之乎、而名曰爲三、字曰子成、俗稱爲敬造、豈無其故乎、吾將就山人而質之。壬寅孟冬、於讀我書齋茂松道人清。此の頃より象谷は一種の髹法を發明せり。これを象谷塗又讚岐彫といふ。即竹籃又は木材を榛として黒漆又は朱漆を塗り、極めて緻密なる花卉草蟲等を彫り、しかして同色又は黒色の漆を以てこれを塗りたるなり。これ即ち支那の張成存星等を本として、我が古昔の髹法を添へたるものなり。又支那の蒟醬の製に據り、蒟醬を作る、甚妙なり、これを讚岐蒟醬といふ。其の後象谷は紫漆白漆を發明せんとて頗る苦心せしが、終に其の目的を達すること能はずして止みぬ。象谷性磊落にして高潔なり、常に文人墨客に交はり、書畫骨董を愛し、世事を顧みざるもの多しといふ。

按に、象谷嘗て漆研を製す。其の製紙を榛とし漆せしものなり。質密にして墨に宜しく且つ軽くして携ふるに便なり、三土梅堂氏の近譬要録に、象谷山人の漆研を作りしは天保十四年に創るとあり。

### 丹阿彌丹後

徳川氏の蒔繪師にして、江戸神田永富町に住す。

### 長府

長府は長門國、府中の人、故に長府と呼びしならん。木地蒔繪を發達せしめたるは此人なりといふ。

### 珍儀

傳詳ならず。



### 堆朱平十郎

堆朱平十郎は慶長年間の人なり。本姓詳ならず、堆朱の技に巧みなるを以て堆朱を氏とし、楊成と號し、徳川氏に仕ふ。子孫世々楊成といひ、業を繼ぎ、神田小柳町に住す。萬延武鑑に御青貝堆朱彫物師、野村治郎兵衛、堆朱楊成とあり。堆朱堆黒は工藝志料に傳へいふ、御土御門天皇の御宇、京師の漆工門入といふ者、始めて製する所なりとあり。其の製は全く支那製を模造せしものにて、先づ朱漆又は黒漆を以て厚く塗りあげ、しかして山水花鳥等を彫刻せしものなり。平十郎は蓋し門入の業を傳へたるものならん。當時大に行はれ、其の門流頗る多し。享保年間京師に堆朱治郎左衛門あり、又江戸に堆朱養清あり。長崎に堆朱勘七あり、これ皆堆朱を氏とし、堆朱堆黒を業とせし有名の工人なり。

按に、堆朱堆黒の技は自ら蒔繪と異なれども、同じくこれ髹飾の技にして、甚相似たれば、此に載す。堆朱氏は徳川氏の時幸阿彌、古満等と共に日光、上野、芝の廟宇に髹技を施したり。しかして其の世々の中に就き、何代何人が名手なりしか今詳ならず。花街漫録紅葉香合の條に堆朱楊成（萬治頃名人の聞えある堆朱彫師なり）が作れる由、蓋裏にしるせりとあり。田中光顯氏所藏楊成作紅花緑葉の香合の極書に正徳四年午九月日、堆朱楊成印、又前田利嗣氏所藏唐物堆朱盆の極書に、寶永四年亥十二月下旬、堆朱楊成畫、此の他諸家傳ふる所の堆朱堆黒の什器に、楊成の極書あるもの極めて多し、これ其の昔時大に行はれたるを知るに足るなり。

又按に、楊成の號は元人張成、楊茂二人の名の一字を取り、名づ



けたるものならん。二人は堆朱を善くす。其の製品は我國に傳へて好事の貴重する所たり。楊成は後に訓みてヨンゼイといふ。これ享保年間江戸に堆朱養清といへる人あり、善く堆朱を製す。これと紛はしきを以てかく訓みたるなりといふ。

又按に、堆朱は漢名剔紅、刀を以て漆面に彫鏤するをいふ。即堆朱彫物又堆彫ともいふ。藝苑日涉に曰く、剔紅或謂之彫紅、即彫漆也。偽造者曰堆紅或謂之罩紅俗通名堆朱江戸有楊成者、世以善彫漆隸于官、余嘗問其所業曰、元有張成楊茂周明、家世傳其法、其品目頗夥、曰、剔紅、紅漆爲地以硃漆堆起三十余層、刻人物樓臺花卉翎毛及連環、曰堆紅硃漆黑漆層々堆起、刻痕有細黑糸繚繞、曰、堆烏黑漆層々有細紅糸多刻作連環、曰堆漆、全用黑漆刻作連環及花卉、曰、桂漿、黃漆爲地、以黑漆堆起中有三層細紅糸、曰、

紅葩綠葉、用彩漆刻花卉翎毛、曰金糸、黃黑硃漆重疊堆起、曰、犀皮、或名松皮、硃黃黑漆重疊堆起罩以黑漆、刻連環、差淺且漫、此其大略也。

髹飾錄彫鏤第十に、堆朱の品類を擧ぐ、曰、剔紅。曰、金銀胎剔紅。曰、剔黃。曰、剔黑。曰、剔彩。曰、複色彫漆。曰、堆紅。一名罩紅。曰、堆綵。曰、剔犀。曰、鐫蚰。曰、欸綵。

工藝志料に堆朱と同質にして彫刻の淺きものあり、これを波志加彫といふと。又彩漆數十遍を施して後に屈曲の文を彫るものあり、これを屈輪といふなり。

又按に、堆朱堆黒の什器に製作者の名を彫り付けたるあり、其の文字細小にして恰も針をもて彫りたるもの如し。これを針銘といふ。文晁畫談に橘宜櫛が聚遠雜記に堆朱累々香盒香盆等の底に



作者の名を彫付けある楊茂張成の類、これは東山殿の御物に成りてより、能阿彌相阿彌が極めて彫付けたる者なり。夫故手跡日本なり。此彫付ること、小刀の先にてはならず、鼠の牙の尖りにて彫るとなり。先に余が見る所二つ何れも張成造の三字あり、細楷端正にして、吾邦の人の書に似ず、此頃一商家に堆朱盆を見る、底に鶴隨苔徑洗衣僧、犬吠竹籬估酒客の二句を彫り、傍に張成造の三字あり、字の大き蠅頭の如く、數拭專瞠して初めて辨すべし。好古堂書畫記に、張成香合の銘は針を以て彫すといふに符す。東山殿の御物にて能相の彫りしもあるべけれど、余が見しものは華人彫せしものなるべしとあり。雜記の説疑ふべし。

### 土田宗悦

土田宗悦は京師の人なるべし、光悦の風を慕ひ、蒔繪をなし、光悦の模造を製すること多し。尾形光琳と同時代なり。土田氏後に江戸に來りしにや、裝劍奇賞蒔繪師の條に土田半六、江戸赤阪住とあるは、蓋し宗悦の後なるべし

### 天下 一

幸阿彌長清、天正年間禁中の諸御調度に蒔繪して、天下一の號を賜はりし名稱なり。

### 得好齋

傳詳ならず。

### 百々玉泉 並玉善



百々玉泉は京師の人なり。俗稱善次郎、其の先は江州彦根の藩士にして祖父某に至り蒔繪を業とす。玉泉父の業を繼ぎ、蒔繪に従事せしが、其の技大に上達し、當時良工を以て稱せられ、其名遠近に聞ゆ。よりて諸國富豪の依頼常に絶ゆることなく、其の利益も亦甚多ければ、生計頗豊にして一生涯絹物のみを身に纏うて送りしといふ。茶事を嗜み、北村養軒に學び、遂に其の濫奥を極む。安永四年三月十九日死す。其子玉善業を繼ぐ。玉善の子を玉翁といふ。

### 百々玉翁

玉善の子にして玉泉の孫なり。俗稱新藏、年十九、前田家の調度に蒔繪し、大に賞せらる。其の圖様は琴の海に、天人舞樂の圖なり。其の後仙洞御所および鍋島家の調度に蒔繪する多し。年五十一にし

て江戸に出で、徳川氏より裏葵紋付の衣を賜はりしといふ。玉翁文學を嗜み、當時博學の名ありし中村内記と交はり、最親しかりしといふ。天保十一年十二月十九日死す。

### 中大路茂永

文化、文政頃の人、傳詳ならず。

### 永田友治

永田友治は京師の人なり。蒔繪の名工にして、大に光琳の風を慕ひ、遂に其妙を得たり。蒔繪の下あげに錫粉を用ひることは、此の友治より生まれり。故に後世これを稱して友治上げといふ。蓋し正徳享保頃の人なるべし。友治繪畫を嗜み光琳風の畫を善くす。



### 永田文五郎

京羽二重に御蒔繪師永田文五郎、上京畠山町とあり、蓋し友治の後なるべし、或はいふ、文五郎は安永以後蒔繪の常式にして子孫世々業を襲ぎしが、維新の際其の後を失へりといふ。

### 永田祐助

二世長野横笛の門人にして其の家を継げり。嘉永年間皇居炎上の後、御器を調製し、又和宮御東行の装具、慶應御即位の御道具、皇后御入内の御道具等を調進して、禁中常職の命を蒙る。又諸藩主の献進に係る刀劍の鞘蒔繪等精良の器類を製せりといふ。其の子貞次郎父の業を襲げり。

### 長野横笛

長野横笛は京都の人なり。俗稱次郎兵衛、橘屋と稱す。蒔繪の名工にして殊に茶器類の蒔繪を巧みにし、堺町通押小路上る地に住せり。横笛夙に文學を修め、行狀頗嚴正なり。よりて同業者の推す所となり、其の取締となる。嘗て武藏野圖の茶器二百個を作り、大いに賞せらる。其の他製品中の佳なるものは淺野家所藏、久田好みの菊模様の盃の類なり。死せし年月詳ならず其の子次郎兵衛家を継げり。

### 長野次郎兵衛

横笛の子なり。亦横笛と號せり。驕奢にして其の家宅庭園等頗る豪華を極め、洛東に別荘を設けなごせるも、父横笛に劣らざる蒔繪の上手なりしかば、四方の依頼常に絶ゆることなかりしが、其子の横



笛に至りて家業遂に衰へ嘉永の頃斷絶せり。

### 中原末恒

右衛門少志紀助正の條を見よ。

### 中山胡民

胡民は武藏國葛飾郡寺島村の人中山金左衛門の子にして、通稱を祐吉といふ。幼年の時江戸に出でて原羊遊齋の門人となり、殊に精巧緻密なる蒔繪をよくし、早くも其名を人に知られき。後法橋に敍せられ、泉々と號したり。胡民職業の餘暇茶事を嗜み、俳諧を善くせり。始め兩國矢の倉に住せしが、明治二年今戸に移住し、明る年正月八日歿す。年六十三。向島法泉寺に葬る。其門より小川松民出づ。

孫江民家を繼ぐといふ。

### 奈良貞利

俗稱八郎左衛門といふ。元祿二年、日光東照公宮殿の造營あるや、幸阿彌長道、古満安明等に同行し、日光に至りて蒔繪せり。

### 奈良雪勝

俗稱八左衛門といふ。延寶八年、徳川家綱公の廟を東叡山に造營せるや、幸阿彌長安、菱田房貞等と共に廟扉に蒔繪せり。

### 二宮桃亭

二宮桃亭は寛政年間の人なり。醫を業とし、江戸に住し、傍ら沈金彫を善くせり。其の製は漆器に陰文を彫りて金末を嵌入したるなり。



髹飾錄に鎗劃、註に細縷嵌色、於文爲陰中陰者とある即ちこれなり。蓋し支那の創製ならん。長崎の工人早く既にこれを傳ふ。桃亭亦傳へて最も其の技に長じ、運刀頗る精巧なり。工藝志料にいはいはく、桃亭は鼠の牙を以て刀に代へて以て刻せりと。

按に、輟耕錄に、沈金彫の技を載せて詳なり。曰く嘉興斜塘楊淮髹工、鎗金鎗銀法、凡器用什物先用黑漆爲地、以鍼刻畫或山水樹石、或花竹翎毛、或亭臺屋宇或人物故事、一々完整然、然後用新羅漆、若鎗金則調雌黃、若鎗銀則調韶粉、日曬後、角挑挑嵌所刻縫罅、以金箔或銀箔、依銀匠所用紙糊籠罩、置金銀箔在內、遂施細切取舖已施漆上、新綿揩拭牢實、但著漆者、自然黏住、其餘金銀都在綿上、於熨斗中燒灰、甘鍋內鎔鍛渾不走失、と。髹飾錄鎗劃第十一に曰く、鎗金鎗銀、朱地黑質共可飾、細鈎纖皴、運刀要流

暢、而忌結節、物象細鈎之間、一々劃刷糸爲妙、又有用銀者、謂之鎗銀、註に宜朱黑二質、他色多不可、其文陷以金箔或泥金、用銀者、宜黑色、但一時之美、久則微暗、と。同書に又曰く、余間見宋元之諸器、希有重漆劃花者、戩跡露金胎或銀胎文圖、燦爛文明也、鎗金銀之制、蓋原于此矣、と。

野路善鏡

篠井善齋の子にして、篠井家二代を繼ぐ。天下一與次秀次と稱せらる。利休の塗師となり世にもてはやさる。

野村九圭

江戸の人、次郎又と稱す。



野村休甫

又休甫を九甫に作る。俗稱源三郎。印籠師野村九圭の家を継ぎ、野村と稱す。實は古満巨柳齋の門人なり。寛政享和頃の人。

野村樗平

九圭の弟なり、次郎兵衛と稱す。

野村嘉之

俗稱四郎兵衛といふ。元祿二年、幸阿彌長道、古満安明等に従つて日光に行き東照公宮殿の蒔繪をなせり。

寶珠齋

傳詳ならず。

長谷川巨鱗

傳詳ならず。

長谷川重美

傳詳ならず。

服部永貞

俗稱庄太夫といふ。元祿二年、日光東照公宮殿の造營あるや、幸阿彌長道、古満久藏等に従つて日光に行き蒔繪をなせり。

法印康圓

康圓は康運の子(或はいふ湛慶の甥なりと)にして東寺佛師職に補せ



られ、但馬法印と號す。鎌倉に下り宋人陳和卿が携へ來りし紅花綠葉によりて法華堂の佛具を彫刻せしといふ。これ鎌倉彫のはじまりにして其法を康譽(康勝の子)宗阿彌、淨阿彌に相傳へしといふ。

原 羊 遊 齋

羊遊齋は通稱を久米次郎といひ、號を更山といふ。文化文政の頃江戸神田に住し、當時比類なき蒔繪の名工なりしが其傳詳ならず。弘化二年十二月二十五日歿す。門人中山胡民その業を受け、古満寛哉の門人柴田是真と其名を齊しうせしといふ。

半 三 郎 某

元祿年間の人、京師に住す。青貝細工の名人なり。

菱 田 久 榮

名は房貞、俗稱甚右衛門といふ。延寶八年、徳川家綱公の廟を東叡山に造營せるや、幸阿彌長安、奈良雪勝等と共に、廟扉に蒔繪せり。

菱 田 成 信

俗稱源之丞、又甚右衛門といふ。延寶八年、徳川家綱公の御臺光嚴院殿の廟を東叡山に造營するや、幸阿彌長好、榎本寛繼等と共に蒔繪の工に従事せり。

藤 井 滿 忠

文政年間の人。傳詳ならず。



藤井滿喬

滿忠の子にして名手なり、慶應二年八月歿す。

藤田爲正

俗稱三郎右衛門といふ。貞享元年、徳川綱吉公の姫君鶴子が、紀伊中將綱教侯と結婚せし時、幸阿彌長好の業を助けて香棚、其の他の調度に蒔繪せり。

本阿彌光悦

光悦會編纂の「光悦」に、翁の蒔繪と題して曰く、秀吉一代の豪奢は、おのづから美術工藝發達の機運を與へたりしが、秀吉はまた頗る其保護獎勵に力め、或は樂燒の元祖長祐を聚樂の邸内に住ましめ、或

は蒔繪師幸阿彌長晏を引見し、其他陶工、漆工、金工等に天下一の名譽稱號を與へ依つて以て藝術發達の一因子となしたりき、就中其長晏を引見したるは髹漆界の衰頹を挽回せん動機に出でたりしもの如く、爾後諸種の器物の製作を命じたりしより絶えて久しく萎靡振はざりし蒔繪の業もここに復興の機運に向ひ、諸處に散逸したる名工も京都烏丸に集りて其技を磨き、所謂時代蒔繪の盛況を見るに至れり、爾來いくばくもなくして漆工藝術上に一大偉觀を呈したるものあり、翁の蒔繪即ち是なり、翁は能書能畫の素養によりて自在に漆筆をふるひ、巧みに鉛、錫、青貝等を配して特殊の一新生面を開きたり、從來蒔繪の下繪は支那風に傾くもの多かりしに、翁は専ら大和繪を取り、茶道の趣味を加へ、之れに獨特の書を配したるさへ一種の新意たるに、金蒔繪に鉛、青貝を嵌入する等前代に比類な



き破天荒の試みは、人の意表に出でて一世の歓迎を受け、漆工界の一革命を促すに至れるなり。翁はもとより、技巧をもとめず、其主眼とする所は意匠と氣韻との妙をあらはさんとするにあり、意匠の嶄新にして大膽なると、氣韻の豊富にして高雅なるとは、翁の如き精神的修養の非凡なる人にあらずんば、到底成す能はざる所なり。その流風餘韻は光琳の倣ふところとなりて、光琳蒔繪を生せり、光琳は畫に於て翁を慕ひたるのみならず、蒔繪に於ても亦翁の妙技に心酔し、第二の翁たるを以て其理想としたりしものの如し、大阪平瀬龜之助氏所藏光琳の住の江蒔繪硯箱、同藤田傳三郎氏藏同櫻狩蒔繪硯箱等、一として翁の作意を模せざるはあらず、光琳在世の日、窮餘、秘藏の翁の作、鹿の硯箱を典質せるを見ても、如何に平素翁の妙技に私淑し居りしかを知るべからずや。思ふに世に光悦蒔繪と

稱ふるものは、之を分つて三種となすべし、一は翁の意匠に成るもの、一は翁の自畫圖案によるもの、一は翁自ら漆筆をふるうて描畫したるもの是なり。而して翁の意匠圖案によりて漆工の手に製作せられたるものは、概ね精巧にして鮮麗なり、翁の自作と見ゆるものはもとより其緒餘なれば、雅致に富むも艶麗の觀少なし。翁の作品と稱するものの中、帝室博物館所藏の舟橋硯箱、及侯爵蜂須賀茂韶氏所藏の子の日の棚、男爵岩崎小彌太氏所藏の謠本箱等は何れも翁の傑作にして、具眼者の嘆賞措く能はざる所なり。子の日の棚は去る明治四十四年日英博覽會に日本蒔繪の代表作として倫敦に出陳せられ、日本藝術の精華として多大の印象を外人に與へたるものとす

べ。

「工藝鏡」にいはく、光悦幼名は次郎三郎、太虚菴と號し、又自德齋、



徳友齋など號す。父を次郎左衛門入道光二といひ、母を妙秀といふ。光二は多賀豊後守高忠の二男片岡次太夫が子にして本阿彌光心の養子となり、其家を相續せしが、後光心の子光利生れしかば、光二自ら退身して別家となりぬ。(光二慶長八年十二月廿七日歿年八十二)光悦、幼年より多能にて刀劔鑑定磨礪淨拭の三事に長せしのみならず、書畫をよくし、また陶器蒔繪をよくせり。書ははじめ空海をしたひて、其蘊奥を極められしが、後道風の古今集につきて假名をも習はれ其妙境を得られたり。此の古今集は今本阿彌切といふものなり。當時近衛三藐院、松花堂昭乗とを併せて慶長の三筆と稱せられ、其の流を受け學ぶものも多かりしが、ことに嵯峨の角倉素菴上足の弟子なりき。畫は海北友松を師とし土佐風を交へて別に逸格を出だせり。墨畫少くして設色の濃畫多し。又陶器は長次郎の樂焼を好みて

赤くすりのものをつくられしが、多くは茶碗にしてまれに香合の類ありといふ。この他瀬戸光悦、膳所光悦、萩光悦、加賀光悦などありて皆世人に賞翫せらる。殊に蒔繪は能書能畫の力によりて一種の新意を出だし、鉛錫青貝をあしらひて繪様を巧みにつくられしかば、甚だ雅致あり。これより蒔繪の風一變して其畫様も支那畫にのみかたよらざることとなりて多くは優美高尚なる大和繪を下繪とし、また狩野家の畫を下繪とすることなれり。江戸將軍時代に至り、蒔繪の著く進歩せしものは偏に光琳の力といふべし。一日光悦、關白近衛應山公の宴に侍す。公曰く、予吉光と正宗との刀を併せ見て正宗の方勝ることを知れり、子が説如何と。光悦曰く、吉光の方勝れりと。互にかたく已が説をとりて議論決せず。他日光悦、公の宴に侍し、家隆卿の「あさひさすたかねのみゆきそらはれてたちもおよ



ばぬふじのかはきり」の歌を誦してその評を乞ふ。公曰く、まことに佳趣あるを覺ゆと。光悦また赤人の田子の浦ゆうちいでて見ればましろにぞ富士のたかねに雪はふりけるの歌を誦して其の評を乞ふ。公曰く、佳趣なしといへども其調高しと。光悦膝を進めて曰く、家隆の歌は正宗なり。赤人の歌は吉光なり。其妙鍛正宗に勝ること遠しと。光悦の才氣概ねこの類なり。京城の北鷹峰の地、丹波に通ふ要路なれども、山嶺重疊樹木蒼鬱人家至て稀れなりしかば、盜賊群居して往々行人を惱まししに、寛永中光悦この地を賜はり、家居してより賊悉く避け去りしとなり。光悦自ら了寂院と號し、晩に一寺を鷹峰に建て光悦寺と號す。光悦性寡欲、鷹峰に閑居するに及びて資材を親族朋友に分け與へ、自ら麤器を擇びとりて茶を喫し以て逸樂とせりといふ。寛永十四年二月三日歿す。年七十。光悦寺に葬る、

光悦子なし、光瑳を養ひて嗣とす。

蒔繪師市兵衛

蒔繪師市兵衛は加州金澤の人なり。傳詳ならず。

蒔繪師源三郎

蒔繪師源三郎は姓氏詳ならず。奈良の人にして蒔繪を業とし、元祿年間大に行はる。蒔繪の餘暇、繪畫を善くし、嘗て「人倫訓蒙圖彙」および「描金畫斧」五卷を著はす。畫斧後に標題を改め「蒔繪大全」と稱し、今猶行はる。書中には専ら杯の蒔繪圖を載せてあり。飯島虛心翁いはく、浮世繪類考、蒔繪師源三郎の條に醒世翁曰く、元祿五年の刻本に此の名あり、西鶴が作の讀本の挿畫は、名を著



はさずといへども、多く此の人の畫なりと。又退私録に、奈良の天蓋といふ所に、塗師屋源三郎といふ者あり、新井白石其の家に於いて珠光が所持せしといふ徐熙の鷺の畫を見たることを載せてあり、されば、書畫なども嗜みたる人にや、いづれ尋常の工人にあらざるべしと。

漆山天童いはく、人倫訓蒙圖彙は七卷の中三の卷より後少しく源三郎の筆なり。又「描金畫斧」は世人源三郎筆なりといへど春川甫政の筆にて、後に蒔繪大全と改題したりといへば、別本ともおもはれず、まぎれも無く甫政の筆にて、又専ら杯の蒔繪圖を載せてありといへど、卷一は印籠、香合、千種香道具、髮揚具、文箱、ひろ蓋、小刀鞘、面箱、料紙、硯箱、高杯卷二は盃と杯臺にて、卷三は櫛、食籠、吸物椀、提重、汁次、瓶子、獨行厨、双六盤、

卷四は樂器、掛硯箱、鏡篋、沈箱、鏡臺、衣桁、湯桶盥、五倍子筒、卷五は硯蓋、菓子筆筒、文臺、重箱、掛盤、小四方、三方、食次、ほかい貝桶、帶箱、依懸、高臺なりと。

漆山天童又いはく、源三郎は畫に於いて住吉具慶の門人にて西鶴の浮世草子中、「好色一代男」、「好色二代男」、「近代艶隠者」、「大下馬」等いづれも源三郎筆にて其他矢張西鶴の作にて貞享元年版の「古今俳諧女歌仙」を畫き、同じき貞享四年には「撰集抄」九卷の挿繪を畫けり、と。

### 蒔繪師清兵衛

蒔繪師清兵衛は姓氏詳ならず。大阪伏見町邊に住せし人にて、寶永年間の名工なり。最印籠を造るに妙を得、世に清兵衛のばら印籠と



稱し賞翫するものこれなり。ばら印籠とは重ねをばらくくにして合はするに下を上を重ねに合せ、又裏を表に合はするも、其の工合しつくりとして同じ様なればいふ。清兵衛後に江戸に召されしが、箱根の宿にて病みて歿す、惜むべし。

### 蒔繪師則季

安元元年後白河上皇五十の賀宴を開き、天下の諸工藝家の俊秀なる者を召見せり。時に蒔繪師則季、平文師清原貞安といふ者あり、並に召されて上皇に見ゆ。時人稱して名譽となせりといふ。

### 松井佐一

文政年間の人、傳詳ならず。

### 源重直

壽永三年、後鳥羽天皇大嘗會を行ふ時に、朝廷諸名匠を召集し、其の用ひる所の諸器を造らしむ。螺鈿工は則ち右兵衛府生源重直、散位中原貞清、藤井守貞、中原貞仲、紀末次なり。並に皆當時の妙手と稱せらる。

### 望月重藏

江戸の人なり。傳詳ならず。

### 望月半山

小川破笠の門人にして破笠の後を繼げり。福井町に住し、庭に梅の大樹ありしより世に梅の木の半山と呼べりといふ。



門

入

門入は應仁文明のころ京師に住して堆朱をつくりし名工なり。堆朱は堆烏剔紅金絲九連絲紅花綠葉桂漿犀皮松皮等と共に元舶來品にして、茶人に賞翫せられしかど、其作を模するものなかりしに、門入出づるに及びてはじめて堆朱を我邦に於いて製することを得たり。  
 (これより後京都にこの種の職工ありしことは疑ひなし、如何にといふに、金森宗和堆朱ハシカ彫籠形の香合を好みて製せしめしを靈昭女香合と名づけ、一を常修院宮にまゐらせたるに、近衛豫樂院は、常修院宮より茶道をうけ學ばせ給ひしが、此靈昭女香合を譲りうけさせ給ひ、毎年正月元日の棚飾に鶴の羽箒と置合せられし事槐記に見ゆれば、宗和時代京師に堆朱工ありしこと疑ひなしとはいふなり。)

其子孫堆朱屋次郎左衛門といふもの、元祿中京師佛光寺通東洞院西へ入る所に住して堆朱をつくりしが、頗る名工にして其技門入よりも勝れたりとなん。

安 川 某

大阪の人、名手なり。

安 弘

正和四年、朝廷近江國日吉神社を造營す、因りて諸名匠を召集す。螺鈿の貝細工は則ち安弘及び景長なり。並に當時の妙手と稱せらる。

彌 兵 衛 某

元祿頃の人にして、京都に住す。青貝細工の名手なり。



山田常嘉

四四

山田常嘉は始め寺田氏、江戸の人なり。印籠蒔繪の上手なり。天和三年、徳川氏の命を奉じ、幸阿彌長房と共に印籠香箱の類を製せる多し。これより世々相継ぎ、常嘉と稱し、徳川氏に仕へ、御印籠師と稱へ、扶持方を賜ひ、南塗師町に住せりといふ。

按に、寶曆八年板「世諺拾遺」と題せる俳書に、鴛鴦の挿畫ありて常嘉齋の款あり、これ蓋し二世或は三世常嘉齋の筆なるべし、刻板の畫なれば、固より筆力の如何を知る能はざれども、書法狩野に據りて頗る味あるが如し、

山田豊美

傳詳ならず。

山本春正

「工藝鏡」にいはく、春正シユンシャウは通稱次郎三郎、慶長十五年正月廿五日生る、父を山本俊正（通稱次郎兵衛尉剃髮して了悦と號す）といひ、新羅三郎義光の曾孫山本左兵衛尉遠江守義定の裔なりといふ。春正はじめ若狭少將木下長嘯子の門に入りて和歌を學び、大いに其道の蘊奥を極め、二十一代集類句の著あり、板本にして世に行はる。また伊藤仁齋を友として漢籍にも通せりといふ。ことに鬆漆を巧にして頗る蒔繪をよくせしかば、遂に蒔繪師となり世人にもてはやさる。晩年剃髮して法橋に敍せられ舟木と號す。天和二年九月八日歿す。

年七十三、山城西林寺に葬る。其子景正（通稱次郎兵衛）姓を春正と改め、父のあとを繼ぎて蒔繪を業とす、五代正令（通稱勝之丞）

四五



の時、寛政元年正月尾張名古屋に移住し、それより子孫世々名古屋にて蒔繪を業とせしとぞ。と。

漆山天童曰く、山本春正は、實に當時の偉人にして、多藝多能なること本阿彌光悅以後ただ一人にて、強えてこれが類をもとむれば、雛屋立圃あるのみ、この二人は承應明暦頃の二大畸人といふべく、春正歌道を木下長嘯に學べば、立圃は俳諧を松永貞徳に學び、春正蒔繪を以て生活の資とすれば立圃は雛人形を商ひ、春正、「源氏物語繪入」を企てこれに自ら挿繪すれば、立圃は「十帖源氏」を著はして自らこれに書き、春正和歌に堪能なれば、立圃は俳諧の妙を得たる等其の類似の點此くの如く、春正又「源語」以外に「法華經仮名新註抄」に書き其の子景正に刻版せしめたり。と。

### 山本景正 春正二代

通稱次郎兵衛、春正の子なり。姓を春正と改む。小字七十郎といふ父のあとを繼ぎて蒔繪を業とす。寶永四年五月二十六日歿す。綠光院醉山春益と號す。城州西林寺に葬る。

### 山本政幸 三代

通稱八左衛門、小字兵太郎といふ。剃髮して山本常照と號す。父の業を繼ぐ。元文五年九月十三日歿す。八十七歳。清空と號す。城州西林寺に葬る。

### 山本春繼 四代

通稱八左衛門、小字庄吉といふ。寶曆十二年五月、姓字を改めて柏



木伴助と曰ふ。明和七年五月十三日歿す、歳六十八。積山澄善と號す。城州西林寺に葬る。

山本正令 五代

小字勝之丞、姓を春正に復す。京師二條通東洞院東へ入所に住す。天明八年正月晦日禁裏炎焼の節類焼す。其後寛政元年正月、尾州名古屋に移住す。老年に及びて剃髮す。享和三年五月廿五日歿す。歳七十。得住と號す。名古屋南寺町極樂寺に葬る。

山本正之 六代

俗稱又四郎、小字與三次郎、文政八年剃髮して敬道と號す。天保二年二月十七日歿す、年五十八歳、名古屋極樂寺に葬る。

山本正徳

次郎、静一菴と號す、五十三歳にて剃髮し、家を弟正周に譲る。

山本正周 八代

小字清五郎、正之の季子なり。兄正徳の後を繼ぐ。明治十年三月六日歿す。歳六十二。

山本正章

正周の子なり。

山本正兼

正周の次男なり。



### 山本利兵衛

初代利兵衛は實名を武繼といふ。元丹波桑田郡の人にして寶永のころ京師へ出でて吉文字屋某の弟子となり髹漆の法を學び、正徳四年歳廿九のときより開業せしが、忽ち髹漆を以て都下に其名を知られたり。殊に延享三年桃園天皇御即位の時漆器の調進を命せられしが如きは、この人一代中の名譽なりしとぞ。明和三年九月廿七日歿す。年七十九。洛東眞如堂に葬らる。其の子孫代々利兵衛の名を襲用して髹漆の業に従事せりといふ。

### 山本周三

俗稱利兵衛、武繼の子なり。塗師及び蒔繪を父に學びて善く其の法を得たり。明和八年後桃園天皇御即位の御調度に蒔繪せり。寛政三

年四月二十日死す。年四十九。洛東眞如堂に葬る。法號諦譽慈光禪定門、其の子光春後を繼ぐ。

### 山本光春

俗稱利兵衛、嶺月と號す、周三の子なり。蒔繪を父に學び、名手と稱せらる。性畫を嗜み、吉田法眼元陳の門に入り、狩野風の畫を善くす。嘗て禁中の御屏風に山水を畫き賞せらる。文化十四年、仁孝天皇御即位の御調度に蒔繪し、禁中蒔繪の常式となる。嘗て龜甲形の印籠を工夫し、又千鳥形の盃を製し、好事の愛翫する所となる。又彫刻を善くし、木彫の蓬萊山今猶其の家に存せりといふ。天保九年死、年六十九。其の子武光、家を繼げり。

### 山本武光



光春の子なり。蒔繪を善くし、専ら古名家の作に倣ひ製作するところ多し。禁中蒔繪の常式となり、諸御調度に蒔繪し、又和宮御降嫁の諸調度に蒔繪せり。明治三年六月八日歿す。

按に、山本利兵衛の祖は、寶永の頃吉文字屋某に就きて法を學び、正徳四年に開業せり。二代は安永の御即位、調度品の製造を命せられ、三代は文化の御即位、四代は弘化の御即位、并に嘉永七年禁裏炎上後の御器を調進し、安政四年内裏常職を命せられ、同六年和宮御用具を調進せり。今の代の利兵衛に至りて五代なりといふ。慶應の御即位并に皇后宮御入内御用具を調進せり

### 蒔繪師傳終

### ○塗師之部

#### 池田源兵衛

池田源兵衛は津輕の藩士なり。寛文十年藩主源兵衛を江戸に遣はし、髹法を學ばしむ。業半ばにして死す。其の子源兵衛、元祿十年江戸に出で、青海太郎左衛門の徒弟となり、髹法を學び、業成りて國に歸り、韓塗および青海波文を製す、これより世々相繼ぎ、青海を氏とし源兵衛と稱し、傳へて今に至る。

工藝志料に曰く、津輕塗は、陸奥國津輕郡弘前町及び造道村に於いて製する所の物なり、而して其の始詳ならず、其の髹法は若狹塗に髣髴たる物にして、彩漆を用ひて文をなす。其の狀雲の如し、但し金銀箔を用ひずして、製を若狹塗と異にせり。近年錦塗又は



韓塗と稱する髹法を用ひ、其の上に或は雲鶴或は千鳥、或は鐵線蔓、或は桐、或は鳳凰等の文を散布せる器物を製出す云云と。

### 石岡庄壽郎

寶永年間、羽後國能代の人

### 雨 桶

雨桶は姓氏詳ならず、嘉永年間の人にして、尾州名古屋に住せり。其の本業は農にして、傍ら髹技を嗜み、一種の漆器を製出せり。其の製は春慶漆をもて椀、盆、杯洗など塗りたるあり、一見粗糙に似たれども、頗る親切にして雅味あり、これを雨桶塗といふ。最様に注意し、常に信州地方より椀、盆、杯洗其の他の様數百個を購入し

て風雨に晒すこと凡そ三年、中に就き其の屈曲を生せざるものを選び、これに髹技を施せるなり。名古屋の地、茶人多し、皆競ひてこれを購ひ珍重せり。雨桶死に臨み兒孫および徒弟に遺言して曰く、我が製せし漆器、他日若し骨董店に見當らば價を論せず購入して破壊すべしと。其の意蓋し己が髹技の未だ到らざる所あるを悔いてしかいへるならんといふ。徒弟某後を繼ぎ、二世雨桶と稱す。一世と同じく農業の間にあらざれば髹技をなさず、爲すといへども賣るを欲せず、故に世人愈珍重せり。

### 上田喜三郎

鞍具の蒔繪師、安政年間、江戸の人

### 梅田三五郎



安政年間、加賀金澤の人

### 漆部造兄

用明天皇の朝の塗師にして、漆部の督長たり。

### 大久保辰五郎

大久保辰五郎は阿波國美馬郡半田村の人なり。其の先は近江國筒井領の様工にして元祿年間半田に來り、日用膳椀の類を製し、四方に販賣せり、其の子龜五郎業を繼ぎ、藩廳漆問屋の役員となる。其の子は即ち辰五郎なり。辰五郎文化年間藩命を奉じ、領内に漆樹を栽培し、又會津の蒔繪師を備ひ髹法を一變し、諸漆器を製出し、販路大に開け、産額頗る多し、天保二年漆器の業大に藩主に利益あるを

以て辰五郎の功を賞し、士族に列せしむ。子孫業を傳へ今日に至る。抑半田の漆器は其の品等黒江塗に伯仲して固より上等品にあらざれども、製品多くは民間日常の器具なるを以て、販路甚廣し、現今大久保氏の使役する工人は様工四十九戸、磨工三十五戸、漆工二十戸、蒔繪工十二戸、仲賣十一戸ありといふ。

### 太田鐘次郎

徳川氏の塗師なり。

### 大橋庄兵衛

寛政年間京師の人、四世宗哲の門人にして五世六世七世宗哲の後見となる。



大藤長十郎

徳川氏の塗師なり

金子政次郎

寛政年間佐渡雜太郡新町村の人

神田五兵衛

神田五兵衛は、世々播磨國加東郡、平木村に住す。漆工にして農を兼ぬ。其の始詳ならず。中組は慶長年間御嶽山清水寺の座坊なりしが、故ありて今の地に下り木匠を業とす。故に其の材料は舊縁を以て世々寺領の山中におきて伐採するを得たり。維新以後山林悉く官に歸せしも、猶年々若干金を納めて伐採を許さるるの特典ありとい

ふ。其の製品は春慶塗の重箱、その他二種に止まるも需用極めて廣くして世これを清水塗と稱せり、蓋し榛を清水寺の山林に採りたるによる。且木工製のものには、必入金五の焼印を捺といふ。

記 參

紹鷗時代の塗師なり。

木村表齋

木村表齋は江州高島郡、小川村の人なり。夙に京師に出で、塗師柴田藤兵衛の弟子となり、飲食器を製し、京都下京坂井町に住せり、其の最得意とする所は眞塗なれどもまた洗朱の根來風を善くす。京都の人其の妙技を稱して佐野長寛以來の名工なりといふ。明治十八



年二月十四日歿す、年六十九、其の弟彌三郎、二代表齋と稱し、業を繼げり。

清光

正和四年、朝廷近江國日吉神社を造營す。因つて諸名匠を召集す。漆工は即ち清光、守近、守氏、吉長、友重、道性、正圓、友長、法阿、國友、隨親、吉行、守弘なり。並に皆當時の妙手と稱せらる。

國友

清光の條を見よ。

小林敬次郎

徳川氏の塗師なり。傳詳ならず。

近藤道喜

塗師にして近藤道志の男なり。父に従つてよく漆器を製せり。

近藤道惠

塗師にして近藤道志の父なり其の傳詳ならず。

近藤道志

道志は道惠の子にして京師綾小路新町西に住し、小堀遠州、片桐石州の定塗師にて多く茶器をつくりしが、この人ことにイヂく塗を發明せしといふ。イヂく塗とは漆の上面に極細の波紋を起し一種の雅致あるものなりとぞ。其の子道喜も亦よく漆器を製せしとなん。



佐野長寛

長寛通稱は長濱屋治助、高麗の名工張寛五代の孫にして黒漆塗に名あり。壯年に及びて諸國の工場を歴遊し、根來の塗は船中に細工場を設け沖合に出でて仕事すれば塵かからず、吉野は漆樹の若きものを用ひれば光澤よろしなど其場所に就きて漆工の仕方を研究し後江戸に來り將軍家の蒔繪師が紫漆を用ひることを聞き其法を問ひしに秘して傳へず、長寛いと口惜く思ひ、多年研究して終に自ら其法を發明したりといふ。文政八年三十五歳にて京師に歸り、新町三條の家に閉居し頭髮を梳らず、鬚髯をそらず身に弊衣をまとひ、常に新意匠のものをづくり出ださんことのみを勉めたりとなん。かかる人ゆゑ己が意に適せざるものは、千金をいだすとも退けて製せざりし

とぞ。文久三年某月歿す。年七十三。

澤本一國齋

俗稱庄兵衛、蒔繪及び塗師を善くせり。名古屋の人。

篠井秀次

「工藝鏡」にはく、秀次通稱彌五郎善齋と號す。南都の人茶人紹鷗の塗師にて棗を塗るに妙を得たり。其子善鏡氏を野路と改め利休の塗師となり世にもてはやさる。これを天下一與次秀次といふ。これより代々秀次を以て通稱とせしとなん

篠井系圖

秀次初代



善鏡 二代

善紹 三代

林齋 四代

與齋 五代

長菴 六代

篠井善紹

篠井家三代の塗師にして、野路善鏡の子なり。古田織部時代の人なり

篠井長菴

篠井家六代の塗師なり。其傳詳ならず。

篠井與齋

小堀遠州時代の人にして篠井家五代の塗師なり。

篠井林齋

篠井家四代の塗師にして善紹の子なり。京師四條立賣町に住す。小堀遠州の定塗師なり、此人代々の内の名人にて尤も中次を珍賞す。

鹽屋長兵衛

天保年間、越中の人

正圓

清光の條を見よ。

珠光

珠光は姓氏詳ならず、幼名茂吉、香樂菴と號し、又休心法師と稱す。奈良の産にして文明年間の人なり。故あり幼少にして稱名寺の僧と



なる。固より凡人にあらざるを以て二十餘歳の時、住職となり、三十餘歳にして紫野大徳寺に到り一休に就き佛道を極む。一休嘗て虚堂和尚の墨蹟を示して茶は心眼を覺し、我が宗禪定の一助なりといふ。珠光これより點茶に志し、遂に茶道の祖となる。時に足利義政公其の點茶の幽趣妙味あるを賞し、珠光をして還俗せしめ、三條の邊に艸菴を設けこれに居らしめ自ら就きて點茶を學び、珠光菴の額面を書してこれに與ふ。歳八十にして死す。大徳寺中眞珠院に葬る。我が國茶道の宗匠と稱するは實に珠光を以て始めとす。珠光髹法に巧みにして點茶の餘、能く諸漆器殊に茶器を製せしといふ。

## 春 慶

春慶は姓氏詳ならず。泉州堺の漆工にして後龜山天皇の時の人なり。

一種の髹法を發明し、漆器を製す。これを春慶塗といふ。其の製は先づ礬漿を木地に塗り、木理を填め（世にこれを目とめといふ）しかして濃く溶きたる雌黄を塗り、又薄澁を引きて乾かし、其の上を剛き刷子にて荏油少許を和したる吉野漆を塗りたるものなり

黒川眞頼氏曰く、春慶の前、此の如き髹法無きにあらず、東大寺に藏せる所の屏風の襲木は則ちこの春慶塗に類す、又土佐國安喜郡の東寺に藏せる所の大般若經の唐櫃も亦これに類す、しかして春慶を以て此の髹法の名稱となすことは、春慶の製する所のものは古來所傳の髹法に勝るを以ての故ならん。

春慶塗の製これを飛驒に傳へ、飛驒春慶といひ、又能代に傳へ、能代春慶といひ、又粟野に傳へ粟野春慶といふ。



鈴木庄次郎

寛政年間、京師の人。

鈴木 某

弘化年間、飛騨高山の人、淡黄色漆の髹法を發明せりといふ。

隨 親

清光の條を見よ。

寸 法 齋

宗長宗旦等と同時の塗師なり。

盛 阿 彌

「工藝鏡」にいはいはく、盛阿彌は名を紹甫といふ。千利休の塗師にして

豊太閤より天下一の名をゆるさる、子孫三代盛阿彌の號を襲用せしといふと。

關 大 隅

江戸の人、徳川氏の塗師なり。

關 庄次郎

天保年間、江戸の人。

關 宗 長

關宗長は寛永年間の漆工にして能く諸器を製し、漆を以て其の器に銘す。これよりさき、漆工の銘は皆彫鐫しものなるが、宗長漆を以て銘せしより後の漆工皆これに倣ひ、銘をしるし、彫鐫する者稀な



るに至れり。

鑄<sup>セン</sup>

魑<sup>チ</sup>

天保年間、駿河國庵原郡蒲原の人。

道性

清光の條を見よ。

治五右衛門

治五右衛門は姓氏詳ならず、越中の人にして礪波郡城端塗の祖なり。一説に文明年間浄土真宗の僧祐玄といふ者あり、本願寺の僧蓮如と共に越中に來る。治五右衛門は即ちこの祐玄の子なりといふ。嘗て鎮

西に遊び、支那人より漆器の妙技を傳へ家に歸りてこれを製す。其の製は黒漆に各色の漆或は五彩の密陀僧を以て畫きたるものなり。これを城端塗、又治五右衛門塗といふ。子孫業を繼ぎしも今は大に衰へたりといふ。

桐村

紹鷗時代の塗師なり。

飛來一閑

一閑はもと明人にて、寛永年中舊珉、養寛等と俱に歸化せしものにて、號を朝雪齋、金剛山人。蝶々子などいふ西湖飛來蜂下の産なるを以て飛來を氏とし、一閑張を始め、千宗旦、其製作品の雅致ある



を愛せしより其名顯はれて世人に賞翫せらる。晩年大徳寺清巖和尚に歸依し、禪學を修め傍ら書畫をよくす。明暦三年十一月二十日歿す。年八十。紫野大徳寺中高桐院に葬る。子孫代々其法を傳へて十二代に及べりといふ。

### 遠坂宇兵衛

傳詳ならず。

友 重

清光の條を見よ。

友 長

清光の條を見よ。

### 中村 宗哲

塗師中村家の祖先なり。宗哲通稱八郎兵衛、名を玄弼といひ、號を漆翁、勇齋、又方寸齋といふ。點茶を好み、藤村庸軒と交り深し。この人より代々千家の塗師となれりとぞ。元祿八年五月歿す、年七十九。子孫相つぎて名工いでしと雖も、世人ことに三代漆桶宗哲の作を賞翫せり。

### 中村 元哲

中村家の二代なり。通稱八兵衛、勇齋と號す。

### 中村 汲齋

中村家三代にして、漆桶宗哲を以て名あり。通稱八兵衛、紹朴又勇



齋と號す。中村家塗師七代の内此の三代最も世に賞翫せらる。

中村深齋

中村家四代の塗師にして通稱八郎兵衛、漆翁と號す。實は紹朴の養子なり。

中村獬齋

中村家六代の塗師なり。通稱八兵衛、後八郎兵衛と改む。宗哲と稱す。

中村得立

中村家七代の塗師なり。通稱八兵衛、貌齋と號す。

中村豹齋

中村家五代の塗師なり。通稱八郎兵衛、後八兵衛と改む。漆畝と號す。

成田三左衛門

成田三左衛門は泉州堺の人なり、(或は飛驒の人といふ)金森宗和國主たりし時、一の禽籠を製し、黄色の漆を以てこれを塗り、宗和の父可重に上り、大に賞せらる。又嘗て高橋某が製せし守屋が洞の椹樹の盆に髹技を施し、重近に上り、亦大に賞せらる、其の製は材を批きて片となし之を底板に用ひ、又曲げて周縁を作り、櫻皮を以て綴りたるなり。これ即ち飛驒春慶の始めなりといふ。

黒川眞頼氏曰く、寛永年間金森宗和茶を好み諸工を飛驒國大野郡



高山に集めて茶器を製せしむ。此の際宗和漆工に命じて折敷盆等を造らしむ。其の色黄赤の間色にして褐色を帯びたり、且つ木質透明にして大に雅致あり、世人稱して飛驒春慶といひ、又枇目細工といふ。其の地の工人も亦これに倣うてこれを作る。而して其業歲月に盛んなりと。

### 成田正武

成田三左衛門五世の孫にして、元文年間の人なり。髹技の名人なりといふ。

### 西田宗五郎

徳川氏の塗師なり。

### 西村宗忠

通稱彦兵衛、實名を宗忠といふ。漆器の名人にて、其製作品いづれも優雅にして頗る風韻ありしとぞ。或年普賢菩薩の象に乗りし所の圖を蠟色金蒔繪の匾額にして菩提所へかかげしもの一代中の出来なりしかば、これより京人其名を呼ばずして象彦と稱せしとなん。この匾額天明の火災に罹りて烏有に歸せしといふ。安永二年五月十四日歿す、年五十四。寺町五條の南蓮光寺に葬る。

### 野口豊八

野口豊八は上野國碓氷郡下磯部村の人、髹技を嗜み諸器を製す、一奇翁なり。明治十四年の内國勸業博覽會に紫漆器を出品して褒状を得たり。紫漆は古來漆工の發明せんとして大いに苦心するも其の製



を得ざるところのものなり、然るに一朝にしてこれを製せるといふ、野口豊八氏は斯界の偉人といふべし。

### 野村四郎右衛門

徳川氏の塗師なり。傳詳ならず。

### 橋本市藏

市藏は鞆塗師又次郎の子にして幼名を市三郎といふ。若き頃はいと放縱にして花街にのみ遊びしが、年廿二の時父の重病に罹りしを見、大に前非を悔いてふつに遊ぶことを止め、専ら職業に心を委ねたりとぞ。市藏姓名の頭文字一字づつを取りて橋市（はし一といふ焼印を捺せりといふ）と稱し、年々紺色木綿の頭巾にはし一の文字を染めぬきて乞食非人に施ししが、この事自然に世間に廣まり、橋市の

名高くなりたり。明治元年歳五十にて遁世し頭髪を奴に模し醉阿彌と號し、常に刀に換ふるに黄金もてはりつめたる摺鉢木を腰にさして逍遙せしとぞ。また上野戦争のとき大旗をつくりこれに奴頭の目印をゑがき其下に御鞆塗橋市と大書し、官軍の人々が刀の鞆を無代價にて塗り與へしとなん。このころ世間極めて不景氣なりしに、芝新錢座會津屋敷跡の空地に辨財天を祀り、掛茶屋二百軒をたてて人に貸し與へしかば、同所俄に賑ふて近傍數町の間爲に潤ひたりといふ。市藏天性淡泊にして黄金を見ること土芥の如くなりしかば、山内容堂侯、大久保參議、木戸參議等に愛せられて、しばしば大金を得しも皆これを貧民に施し與へて毫も惜むの情なかりしとなり。明治三年、土州侯の邸に伺候し黄金の銚子に二分金を入れて與へられしに、市藏この金を土州侯鍛冶橋の本邸より箱崎橋の別邸に至る間



の貧民に施して侯の徳を分ち與へたりとて喜びぬ。又同じき年七月大久保參議の用にて京師に赴き、五條坂の陶工清水六兵衛と深く交り、遂に六兵衛のこひにてかの携へたる摺鉢子を二百金にて賣却せしが、又々其金を町年寄某に托して同地の貧民に施し與へて身輕になりしとて笑ひしとなん。大久保參議この事を聞き、銀製の茶道具を贈りて其志をほめられしといふ。廢刀令の出でしより、鞘塗の業を廢止し、竹模造塗を發明して、額面花生菓子器、手箱煙管筒等に施ししかば、忽ち衆人の賞翫する所となり、橋一の名徧く都鄙に知らる。明治六年、澳國萬國博覽會に出品して有功賞牌を得、同じき十年第一回内國勸業博覽會に出品して龍紋賞牌を得、同じき十四年第二回内國勸業博覽會に出品して有功賞牌を得たり。明治十五年二月四日、芝新錢座の宅に歿す。年六十六。市藏子なく、門人某を養

ひて嗣とす。二代橋市と稱して業を繼ぐといふ。

### 服部 藤平

文政年間、大和の人。

### 服部 彌三郎

徳川氏の塗師なり。

### 羽田 五郎

羽田五郎は足利義政公時代の漆工にして、奈良の法界門の傍に住せり。よりて人皆其の製品を指して法界門塗といふ。茶器を製する多し。中に就き、著名なるは羽田盆なり、其の製は盆の内外を眞塗にせしものなり。一説に棗の製は、羽田五郎の創作なりと。



法

阿

清光の條を見よ。

福

藏

福藏は姓氏詳ならず、應永年間の人にして、紀州根來の髹法を傳へ、能登の輪島に至りて漆器を製す。これ即ち輪島塗の祖なり。工人業を傳へ、寛文年間に至り、輪島の傍なる小峰山に於いて一種の粘土を發見し、之を煨焼して漆液に和し漆下の髹料とせしより、品質の堅牢を加へしといふ。

黒川眞頼氏曰く、輪島塗は能登國鳳至郡輪島に於いて製する所の者なり。而して其の始詳ならず。其の製出する所のものは、多く朱漆器、黒漆器にして膳椀、吸物椀、平飯櫃、通盆等の常用の器

なり。其の漆器甚だ堅牢にして久しきに耐ふるを以て世人これを愛すと。

### 福田文吉

福田文吉は下野國上都賀郡日光町の人、其の家世々曲批類の漆器を業とす。往時より同業者團結し、寛政の頃より盛大となり、日光名物中この器類を以て第一とす。就中其の最たるは目摺塗立、木地呂重箱なり。原料は方言に瀬の木と唱へ、日光山中に産するものにして、木理樺に類し、指物となすに宜し、故に近來多くこれを以て木地に供す。又膳を造り、其板面に壽光皮を用ひるなり。壽光皮は古來日光にある胡桃の老樹の皮を剥ぎ取りたるものなりといふ。

### 藤重藤巖



藤嚴は南都の漆工藤元の子にして（元樽井氏を稱せしともいふ）中次を考へ出だしし名工なり。元和元年五月七日大阪落城せしかば、徳川家康藤元藤嚴父子を召し、大阪城に赴き、豊臣氏の寶藏中名物の茶入多ければ、燒跡をさがしつぎ合せて持歸るべき旨命せられぬ。よりに藤嚴大阪に下り寶藏の燒跡をさぐり新田肩衝しき肩衝玉かき文琳小肩衝大尻張等の茶入を見出だし假繼にして六月十二日京都へ持歸り徳川家康に獻せしに、大いに喜ばれ、其の賞として米百石に二十人扶持を給はりぬ。猶他にも缺損せしものあるべしとて再び搜索を命せられしかば、藤嚴いそぎ大阪に趣き、なほ寶藏の燒跡をあさり求めて付藻宗契肩衝針屋圓坐松本茄子等の茶入を得て六月廿六日假繼のまま京都に持歸り前の如く徳川家康に獻せしに掌うちて日本一の重寶なりとほめられ付藻を藤元に、松本茄子を藤嚴に給はり

ぬ。これより陶器の缺損せるを漆にてつぐ事いできぬるとなん。

藤重藤元

藤元は藤嚴の父なり。其の傳は藤嚴の條に詳なり。

藤田重兵衛

明和年間、飛田高山の人。

戻野九助

元祿年間、京師の人。

俣野寛兵衛

俣野寛兵衛の祖は丹波國南桑田郡北ノ庄村の農、俣野利兵衛の次男



にして寛永年間京師に來り、塗師を業とし傳へて寛兵衛に至るといふ。

### 前村俊造

明治十七年刊の美術新報にいはく、黒漆に色漆又は五彩の密陀を以て畫きし漆器は百年以前越中國礪波郡城端の漆工治五右衛門といふ者の發明にて子孫其の業を傳へ、今より五十年程前の治五右衛門の時其術大に進み、精巧なる漆畫器を製し出だせしより、世に城端塗或は治五右衛門塗と唱へて賞せられしが、其術は代々深く秘して謂ゆる一子相傳として、臨終の時ならざれば其子にも傳へず、されば平生の製造も別室に籠りて他見を許さざりし、斯の家傳の製方なれども、其中興の子は敢へて漆器を好まざりければ、家業も衰へ、隨

て死後は其法を知る者なく、徒に消滅したりしが、爰に同國福光郷に前村俊造といふ者あり、此人深く城端の製を慕ひ、其術を發揮せんとて、苦辛を極め、數十回試験せしも、いつも徒勞に屬せしが、更に精力を盡して工夫をなし、去る十四年には新に良工を雇ひ、精神をこめて髹器製造に従事し城端にも譲らざるの器を製するに至りしと。

### 三上治助

三上治助は近江國栗本郡、駒井澤村の人なり。年十六にして京師に出で、三上佐助の家にて隸仕する十七年、其の間髹法を研究し、嘉永三年主家三上氏を稱するを許され、遂に別に一家をなし漆器を製し大に行はる。これ今京師の塗師三上治三郎の祖なりといふ。



三谷傳次郎

文化年間、加賀山中村の人。

三見宿禰

孝安天皇の朝の人にして、漆部連の祖なり。

源良直

嘉永三年後鳥羽天皇、大嘗會を行ふ時に、朝廷諸名匠を召集し、其の用ひる所の諸器を造らしむ。漆工は則ち右衛門少志源良直、右衛門少志中原永盛なり。並に皆當時の名手と稱せらる。

守氏

清光の條を見よ

守近

清光の條を見よ。

守弘

清光の條を見よ。

安福吉五郎

但馬國朝來郡竹田の人、寶永年間業を開く、これ竹田椀製造の祖なりといふ。

安福源七

安永年間、但馬竹田の人。



柳瀬柳齋

塗師にして蒔繪を善くす。文政年間江戸の人。

山打三九郎

山打三九郎は飛驒の漆工なり。延寶天和年間出羽國山本郡能代に至り漆器を製す。世人これを能代塗といふ。其の製は即ち春慶塗の精製にして透明一點の塵なし。工人業を傳へて今日に至る。

工藝志料に曰く、靈元天皇の御宇飛驒の工人山打三九郎といふ者、出羽の能代に至りて始めてこれを製す、其の色淡黄にして木質透明なり。世にこれを能代春慶といふ。飛驒春慶と共に春慶塗の冠たるものなり。傳へていふ、其の細塵の汚點を忌みて舟を海上に泛べて其の中に塗ると。其の注意の厚きことおもふべし。其の製

出する所の者は、棚、廣蓋、重箱、折敷等にして甚精巧なり、故に衆人頗るこれを愛玩すと。

山本安兵衛

山本安兵衛は駿河國静岡の人なり。文政年間、業を起し、諸漆器を製す。中に就き寄木の製法最も世人の珍賞する所となる。然れども當時其の製法精しからず。紋様の種類も亦甚だ少なし、安兵衛種々の紋様を工夫し、十有二三種の多きに至れりといふ。

遊佐忠藏

天保年間、陸前國玉造郡鳴子村の人。

余參



紹鷗時代の塗師なり。

吉長

清光の條を見よ。

吉行

清光の條を見よ。

若井源助

延享二年開業、伊勢度會郡山田の塗師なり。

蒔繪師塗師兩工傳終

198  
445



198  
445



